

玉川村は玉川大（東京都）と連携し、空き家になっていた元民宿兼食堂「プレスティータまかわ」を村内の滞在拠点として改修する取り組みを始めた。同大芸術学部（以下、芸術学部）の知見や学生のアイデアを改修方針に取り入れ、移住希望者やイベント参加者が滞在しやすい空間をつくる。

「かわいいすりガラスをうまく活用したい」「面白い装飾やレトロな造りを生かしたい」。11日に初めて現地を訪れた同学部講師の堀場絵更さん（33）と2、3年生6人は図面を広げて改修案を練った。

村によると建物は木造2階建て。建てられて半世紀以上になる。村は昨年、空き家活用の実証事業として同施設を整備したが、より利用しやすい施設に改修するために若者の力を頼った。

村民にとってなじみのある雰囲気を残しつつ、村外からも訪れたいなる施設にする。学生たちはこの日、改修の方向性を定めていった。建物内を測量した3年の富岡奏楽さん（21）「いわき市出身」は「現地に来ると図面で見ると違ってわくわくする。村内外の人に親しみを持ってもらえる施設にしたい」と意気込んだ。

実習の場を得た学生たちの意欲は高い。堀場さんは「実際の物件の改修に携わ

玉川大生 玉川村に活力

元民宿改修へアイデア



魅力的な滞在施設に

った例はなかった。実地で学べるのはありがたい」と強調する。3年の山下紗幸さん（20）「神奈川県出身」は「実際に物件を見て作業できるので、今までで一番

●施設内で図面を広げ、改修案を考えた玉川大芸術学部の学生ら＝11日午後、玉川村・プレスティータまかわ
●玉川大芸術学部の学生が改修に携わるプレスティータまかわ。村内の滞在拠点として活用を目指す

おり、須釜泰一村長は「若い人の感覚を取り入れることが重要だ。学生のアイデアを生かして魅力的な施設にしたい」と力を込めた。

名前縁に連携協定

村は2017年に「玉川」が共通する縁で同大と連携協定を結び、6次化商品の開発などに取り組んできた。今回は空き家の利活用や産業振興など多様な地域課題の解決に若い発想を取り入れるべく、総務省の「ふるさとミライカレッジ」事業を活用した。村によると、同事業の採択は本県初。

事業では空き家の改修に加え、農学部の協力でふるさと納税の返礼品を開発し農家の収益向上を目指す。教育学部の学生らによる学習支援や管弦楽団を招いた演奏会も盛り込んでいる。

